

「緩和ケアで生と向き合う」ではないの？

阿部幸泰

9 / 1 4 朝日新聞朝刊 2 6 P (科学・医療) 「カルテの余白ー麻醉科ー」欄に、Dr の「緩和ケアで死と向かい合う」が記載されていた。がんの進行に伴う痛みや不快も最近、麻酔薬の適切な処方で身体的な痛みをコントロールすることで生活全般が大いに改善され、生活の質 (Q O L) を高めることが可能になってきた、という趣旨の記事であった。医学の進歩によるそのことは大変喜ばしいことと思う。

ただ、私はこの記事の中で、緩和ケアに携わる他の医師の「患者さんが、いずれ訪れる死と向き合うために、それまでの人生で培った主観や価値観から解放されることが、終末医療を含めた緩和ケアの主題だ」といった言葉を引用され、筆者はこの言葉を「心に残る」と記している箇所が、どうも引っかかった。

筆者の記事の趣旨から外れるかもしれないが、「それまでの人生で培った主観や価値観から解放される」ことにより生活の質が高まるというのであれば、それまでのその患者の人生は何だったのか、ということにはならないだろうか。病を患った上に、自分の過去の人生に疑問をもつことになりかねず、こうした言葉の表現は当事者に配慮を欠くのではないかと、私には思える。

また、もし解放されることで残り少ないかもしれない生活の質 (Q O L) を充実できるというのであれば、その体験から得た主観、価値観から、全ての人に普遍的な課題である「生きるということはどういうことか」が、見えてくるのではないだろうか。

言い換えれば、そうした主観、価値観で従来から考えつつ生活していれば、人としての本質的な生活の充実が可能ということでもあろう。あえてガンになってから「解放」といわなくても、いいのではないだろうかとも考えられる。

一方、もしそうであるなら、がんを煩った方々から、我々が「生きる」を考えるに参考となるであろう主観、価値観を更に大いに発信していただき、現時点での生活の充実へ、共に助け合いながら歩んで行けるのではないだろうか。そこにこそ、「緩和ケア」の本質があるような気がする。だって極論ですが、命長らえても孤独では辛いものね。

「緩和ケアで死と向かい合う」のでなく、正に、「緩和ケアで普遍的な生と向かい合う」という表現こそ、大事なことのように思える。

この新聞記事を目にして、ふとこんなことを思った。